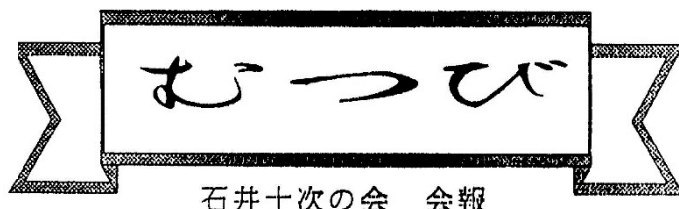


2022年
(令和4年)
11月11日



302号

校長講話に魂を込めて

高千穂町立岩戸小学校 校長 押方彰一

はじめに

今年5月に、大恩人の竹之下悟先生から会報「むつび」の原稿依頼がありました。

お引き受けしたのはいいのですが、歴史と伝統ある石井十次の会の会報に、私のような会員なりたての浅学の者が、何を書けばいいのか悩ましい日々を過ごすことになってしまいました。

会員の皆様には大変恐縮に存じますが、学校の責任者である校長として、子どもたちの成長を願いながら取り組んできた一端を書かせていただきます。ご容赦ください。

1 校長講話は授業である

校長11年目（現役8年、再任用3年）になります。いつも心がけてきたことは、校長の講話は、授業であるということです。これも竹之下先生の教えの一つです。

校長が子どもたちに直接授業をすることはほとんどありません（私は詩や古文、漢文の音読の授業を時々しています）。だからこそ、校長が子どもたちに話す数少ない機会は、私にとって何より貴重な時間でもあります。

11年間、校長講話に魂を込めてきたつもりです。入学式、卒業式は勿論のこと、全校朝会、児童生徒集会、推戴式、各行事での校長あいさつ、PTA総会 等々。

しかしながら、校長の話は、子どもたちにあまり喜ばれていないという声を聞くことがあります。理由として考えられるのは、お説教が多い、くどい、長い、抽象的すぎる、心に響かないなどでしょうか。子どもたちは、校長の話の内容をほとんど覚えていないと言っても言い過ぎではないような気がします。

2 大切にしてきたこと

校長講話で私が大切にしてきたことは次の2つです。

①校長自身の人生観や価値観などを情熱を持って語る。

②目先の枝葉ではなく、物事の本質、原点、根本を実感をもって語る。

教師の言葉で子どもは変わる、教師は子どもの一生を決める言葉を語り得る、それぐらいの気概を持っていないければ教師は務まらないとさえ思っています。「この先生だからこそ、あの話が聞けた」こういう校長でありたいと思いながら務めてきたつもりです。校長の思いを子どもたちに語りながら、一方で職員にも校長の方針を浸透させることを意識してきました。物事の本質、原点、根本を語る事ができる校長でありたいと自戒する日々です。

3 具体的な講話

① 人としての根っこを張る

どの学校にも花壇があり、季節の花が育てられています。学校の玄関や花壇に花がきれいに咲い

ていると、子どもたちだけでなく、来校者の気持ちも和らげてくれます。私は校長になってから、学校の花を育てるようにしています。8月末に種を蒔き、9月に移植したパンジーは、11月頃には根を張って花芽がつくようになります。パンジーは冬の寒さにも強く、寒さに耐えて、春に色とりどりの花を咲かせます。

子どもたちにこのパンジーの苗を、実際に見せながら話します。黒いポットの中は、どうなっているのか、根っこの役割は何か、などを説明します。花はまだ咲いていないのに、根っこはしっかりと張っています。ぐるぐるに巻いている根っこを、驚きを持って子どもたちは見つめます。そこで、次のような話をします。

【なぜ勉強をするのか】

- ・それは大人になって仕事をして、世の中の役に立つ人になるためである。
- ・そのために小学校、中学校で、人として生きていくための基本を勉強する。
- ・学校での勉強は、すべて人として生きていくための根っこを張るためである。
- ・パンジーは寒さに負けず根を張る。丈夫な根を張れば、きれいな花が咲く。
- ・パンジーのように今はしっかり人としての根を張る。そのために勉強をする。
- ・人としての花は、ずっとあとに咲けばいい。

その後、「人としての根っこを張る」のイラストを各教室に掲示して、いつも子どもたちの目に触れるようにしています。

② 心のコップは上向きに

学力が定着する子ども、伸びる子どもは、例外なく「よく聞く」ことのできる子です。教師の話す表情や言葉に注目し、真剣に、誠実に聞く子は確実に学力を伸ばします。私は、1学期の早い段階で、全校朝会などで「聞く」ことの大切さを子どもたちに話すようにしています。

準備するのは、コップ、ペットボトルの水、受け皿などです。コップの役割を尋ねます。コップに水を注ぎ、実際に飲みます。次にコップを伏せて、水を注ぎます。当然、水はコップに入りません。このように実演することで、具体的にイメージさせます。そして、次のように話します。

勉強で先生のお話を聞く時は、目に見えないけれど心の中にコップを置きます。そのコップを上に向けるのです。心のコップを下にしていると、大事な話がコップに入っていくしません。いつも心のコップを上に向けて、一生懸命聞くのです。そういう子が賢くなっていきます。「心のコップは上向きに」、これをいつも忘れずに勉強しましょう。

友だちの発言に対しても同様です。その内容の可否や深淺などを常に評価しながら聞くことが作法です。ぼんやりと聞いたり、どうでもいいやという態度で聞いたりすることは厳に改めさせるよう、本校の先生方にもお願いしています。

おわりに

石井十次の会に入会してまだ日が浅い私です。

前述の具体的な講話 「①人としての根っこを張る」は、岡山孤児院十二則の教えにつながるものであり、また「②心のコップは上向きには」は、とりわけ密室教育に相通ずるものと確信しています。

今後とも、月々の通信等を中心として十次の偉大さを学び続けていきます。

「児島虎次郎 もうひとつの眼」 記念講演会に思ったこと

去る8月28日 高鍋町美術館で、石井十次の娘婿、大原美術館の礎を創った洋画家 児島虎次郎についての記念講演会が開催された。講師は、石井記念友愛社 児嶋草次郎理事長の実兄で、陶芸家、岡山県高梁市成羽美術館理事長の児島塊太郎氏である。塊太郎氏は洋画家・写真家の祖父、虎次郎研究の第一人者である。

講演会は、高鍋町美術館で開催中の特別展（7/23～9/11）「児島虎次郎 もうひとつの眼」に合わせて開かれた。20世紀初頭に虎次郎は、留学や大原美術館の作品収集のため、3度渡欧し、ヨーロッパ各地やエジプトなどの風物や交流のあった人々を撮した写真約100点と、虎次郎の人気の高い絵画作品が一堂に展示された。写真は約100年の歳月を経て、私達に新たな驚きと深い感動を与えてくれた。虎次郎が撮した写真は、今見ても、とても素晴らしい。画家としてのセンスの良さが、写真家としての虎次郎のもうひとつの眼にも感じられる。スエズ運河やマルセイユの港、エジプトの写真など、そのまま絵画になりそうである。

遡ること7月下旬に、私は高鍋町美術館の令和4年度前期常設展（会期2022. 4. 1～9. 11）を鑑賞し、その内容に驚嘆した。

- ①石井十次の写真（鱸利彦の所持品） ②石井十次肖像画（鱸利彦作 油絵）
⑦アイロンがけ（児島虎次郎作 油絵） ⑪黄瀬戸水指（児島塊太郎作 陶芸）
⑬裸婦（児島虎次郎作 水彩画） ※番号は展示番号

24点中5点が石井十次の縁の作品であることに感動し、何度も会場内を見て廻った。

コロナ禍での開催なので、先着予約100名が確保できるか心配されたが、会員の皆様方のご協力により、当日は、西都市長（石井十次の会会長）、高鍋町長、木城町長も出席され、約90名が塊太郎氏の解説に熱心に耳を傾けた。

塊太郎氏は「当時のモネは簡単に会える人ではない。日本人画家だった虎次郎の頑張りが評価されたのだろう」と語った。虎次郎は東京美術学校を成績優秀のため飛び級で2年で卒業した。岡山孤児院を描いた「なさけの庭」が、東京勧業博覧会美術展で1等賞となり、大原家からヨーロッパ留学を許可された。1920年にサロンナショナル日本人初の正会員となる。

私が感心したのは、虎次郎は人と人の巡り合いを大事にしていたことだ。虎次郎は、下宿先の女主人やお世話になった人々を写真に撮して贈っている。美術品の作品収集やモネなど有名画家たちとの交流が順調だったのも、虎次郎の紳士的な振る舞いと大原家の支援の賜物だったと思った。

編集委員 徳地 順子

参考文献 1児島虎次郎 もうひとつの眼 高梁市成羽美術館編
2児島虎次郎と高梁市成羽美術館 日本文教出版株式会社

編集委員だより

9月、相次いで接近、上陸した台風により被害に遭われた多くの方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、20数年前、入学式が終わって10日ほど経ったある日のことです。車から降りてきたA君と母親がそこら中に聞こえるような大きな声で「先生、見て見て。」と。A君が初めてランドセルを背負い、赤白帽子をかぶって私のほうに駆け寄ってくるではありませんか。その姿に周りの職員や子どもたちまでも駆け寄り「かっこいいね。」「一緒に行こう。」とロ々に声をかけてくれたのです。

実は10日ほど前の入学式の日、晴れやかな雰囲気の中、A君の保護者だけは「うちの子はランドセルも帽子もいやがります。」そう言ってうつむいていました。

その日から私たち特別支援教育に携わるものはA君の主体性を尊重しつつ、できる支援をいくつか考え取り組みました。「本人の行動をほめる」「友だちをほめる」「お互いに声を掛け合う」「挑戦しようとした行動は写真に撮り保護者に見せる」等。もちろん、ランドセルや帽子を使ったゲームもどこかしこに取り入れました。そして10日後、保護者の思いに応えることができたのです。母親は涙をこらえ「本人のペースを大事にしながらできることを増やしていきます」そう誓っていました。

このエピソードは私が子どもたち一人ひとりの必要としていることを把握し、生活や学習上の困りごとを改善すべく、「特別支援教育」を学ぶきっかけとなった一コマです。特別支援教育はまさに石井十次の教えに沿った教育に違いありません。



黒木三鶴

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【日向市】新名 明彦 【国富町】いのちのはうす保護家

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】香月 保基 日野 りつ 【木城町】高橋 茂義【岡山県】佐藤 晃一
【熊本県】上坂 義光 【鹿児島県】松崎 孝子

*ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により10月20日までのものとしています。

★12月号の通信発送作業は 12日（月）13日（火）いずれも9時からです

★今年も「収穫感謝祭」は中止とのことです。来年こそは開催できることを祈っております。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp

編集後記

★「むつび」巻頭の1～2頁は押方彰一様に玉稿をいただきました。大変ありがとうございました。

（編集委員 黒木 三鶴）